

現代人の合理的思考のメカニズム

—科学的認識の落とし穴—

駒澤海成（嶋根克己ゼミナール）

HS19-1005C

論文の目次

はじめに

第一章 俗信・ジンクスを信じるための要素

1-1: 回避のための俗信・ジンクス

1-2: 条件付きの俗信・ジンクス

1-3: 子どもの持つ独自の視点

第二章 科学と非科学の比較

2-1: 信頼される非科学

2-2: 非科学の分かりやすさ

2-3: 難解な科学

第三章 2つの合理性と簡易な因果

3-1: 現代の合理性

3-2: もう一つの合理性

3-3: 簡易的な因果関係

結論

おわりに

はじめに

なぜ科学的な現代に生きる人は星占いなどで一喜一憂するのだろうか。

本論文では、人がある出来事を本来の原因とは異なって捉え、時に非科学的な解釈をする認識のメカニズムについて、様々な先行研究の理論を参照し、考察していくものである。

第1章 俗信・ジンクスを信じるための要素

人が信じる非科学的なものに俗信やジンクスがある。それらに根拠がないが、時に人はそれらを信じる。

なぜなら、そういった非科学的なものには人に負の事象を引き起こしうると捉えられるからだ。そして、その回避のために根拠がなくとも

信じるのだ。

一方で正の事象をもたらすこともある。そして、その場合はそのメリットを獲得しようとする。

これらから、デメリットを回避することもメリットを獲得することも単なる一側面に過ぎないと言える。

また、川越ゆり・瀧澤真毅の調査により、時代と場所の異なる子ども達が似た俗信・ジンクスを信じていることから、それらを信じるのに重要なのは子どものような「単純な認知過程」であると述べている（川越・瀧澤 2011）。

つまり、子どものような視点で物事を見るために俗信・ジンクスのようなことでも信じることがあると言える。

だが一方で、老若男女問わず信じる俗信・ジンクスもある。子どもに限らず年代を越え、共通するものがメカニズムの鍵となると言える。

したがって、俗信やジンクスなど非科学的なものを信じる理由には単純な損得勘定ではないと言え、かつ年代を越えた共通点にある鍵があると言える。

第2章 科学と非科学の比較

科学と非科学を分別する大人でも、時として子どもらと同じ考えに至ることがある。

伊藤哲司は愛知県での水不足の際に雨ごいが行われた件を例に、それを時代錯誤と語る一方、効力の是非よりも、効力への期待度が重要とし、理解を越えたものに向き合う際には科学よりも、非科学のほうが心強く感じることもあると述べた（伊藤 1995）。

科学が高度化するにつれ複雑化していき、理

解が難しくなる。一方で、非科学的なものはシンプルで理解しやすい。

つまり、理解できる人が限られる科学と理解できる人の多い非科学では後者に軍配が上がりやすいと言える。

科学的とはいえ、複雑で理解できないなら非科学的なものとの差は無い。むしろ、シンプルで理解できる非科学的なものの方がその分信頼しやすい。

これが年代を越えた人の共通点であり、非科学的なことであっても信じる理由であると言える。

第3章 2つの合理性と因果の創造

私は PC を十分に利用できるが、その仕組みを知らない。だが、前述の通りの非科学的な仕組みがあるとも考えない。

よって、いくら理解できなくとも、ある程度なら合理的な判断を現代の人ではできる。つまり、理解しやすい非科学でも信頼されるのは特定の状況のみだ。ならば、余計に非科学的なことを信じる余地はないだろう。

しかし、現実ではそうではない。したがって、本章では一転し合理性に着目し、いかなる時に科学的な考えの合理性とそうではない非合理性の切り替えをしているかを考察する。

まず、菅野正によれば、かのマックス・ヴェーバーの示す合理性は「形式合理性」であり、したがって現代における合理性とは計算可能性を重視するものであると述べている。

その一方で菅野によれば合理性には、「形式合理性」と対になる「実質合理性」もある。これでは特定の範囲内に限定で、一定の基準を満たす妥当性さえあればそれは合理的となるものだ（菅野 1971）。

これから、合理・非合理と区別することがいかに無意味か分かる。例えば、かつての社会で合理だったことは今では非合理だ。重要なのは、ある一定の基準に沿った妥当性を見出せるかどうかだ。

戸田正直によれば、複雑な世界を全て捉えることは不可能なので、人はその際大幅な切り捨てを行うと述べた。（戸田 1986）

複雑なものを理解する時、切り捨てがおき、それは簡単になる。そして、そこで妥当性を見出され、その時に合理と非合理が切り替わってしまい、逆転するのである。

客観的な合理・非合理というのはあまり意味を持たない。なぜなら、重要なのは基準に沿った妥当性があるかどうかであり、それによって合理性が決定されるからだ。

結論

合理的な考え方ができる現代の人々がどうしても俗信などの非合理的な考えを信じるのか。それは、分かりやすさにある。

複雑難解な科学よりも簡単な非科学のほうが理解しやすい。そして、そこに妥当性を見出せる。ならば、それは実質的に合理的なのだ。

つまり、非合理的なものを信じる時、それは科学を信じる時と同じように合理的なもの信じているのだ。

ただし、この合理性は実質合理性なので一定の範囲にしか影響を及ぼさないことには注意が必要だ。

主要参考文献

- 川越ゆり,瀧澤真毅,2011,「学生の回想データに見る子ども時代のジンクス」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』1:83-103.
- 伊藤哲司,1995,「『俗信を信じる』ということ」『茨城大学人文学部紀要人文学科論集』28:25-56.
- 菅野正,1971,「M・ヴェーバーにおける近代社会の『合理性』について『形式合理性』と『実質合理性』の問題」『社会学評論』21:2-16.
- 戸田正直,1986,「因果関係の認知について」『行動計量学』14:60-70.